



# AWARD

## 第3回 持続発展教育(ESD)大賞 受賞校実践集

主 催：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：日本ユネスコ国内委員会／公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟／株式会社教育新聞社

## はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育とされています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取り組みを積極的に実践する学校を奨励する「持続発展教育（ESD）大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国の持続発展教育の実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続発展教育の推進に寄与することを目指しております。3回目となる今年は、全国の小中高等学校より、昨年を上回る数のご応募をいただきました。(小学校32件、中学校17件、高等学校15件の計64件)

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第3回持続発展教育（ESD）大賞として、6校の学校を表彰し、ここにその実践をまとめさせていただきました。

本冊子が少しでも持続発展教育の実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

なお、第3回持続発展教育（ESD）大賞は、カシオ計算機株式会社様よりご協力をいただきました。

## 第3回持続発展教育（ESD）大賞 受賞校

持続発展教育（ESD）大賞  
東京都江東区立八名川小学校

ユネスコスクール最優秀賞  
東京都大田区立大森第六中学校

小学校賞  
宮城県角田市立東根小学校

中学校賞  
奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校

高等学校賞  
愛知県立豊田東高等学校

審査委員特別賞  
宮城県気仙沼市立面瀬小学校

【講評】 佐野 金吾 NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事  
全国中学校地理教育研究会名誉会長  
一般社団法人全国図書教材協議会長、教育新聞社総合研究所所長

持続発展教育（ESD）大賞は、「各学校で正しいESDの概念に基づいた教育が積極的に実践され、持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与する」ことを目的として平成22年度に設けたものです。ESD大賞への応募校は平成22年度では33校でしたが本年度は64校と飛躍的に増えました。各学校におけるESDへの実践が着実に進んでいる様子がうかがえます。

審査は、ESD大賞の目的とESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う」に基づいて行いました。

なお、審査は次の観点に基づいて審査委員の協議によって行いました。

- ① ESD大賞の目標を実現するための教育活動が組織的・計画的に実践され、その成果が読み取れる。
- ② ESDについての指導内容・方法等に関して工夫改善された新しい提言をしている。

### 持続発展教育大賞 … 東京都江東区立八名川小学校

ESDの目標を実現するための教育活動を地域とともに全校的に取り組んでいる。さらに“NEW! ESDカレンダー”によって意図的・計画的に各教科、領域等の学習活動を横断的、総合的に行っている。

### ユネスコスクール賞 … 東京都大田区立大森第六中学校

中学校の特性を生かした地域と連携した防災活動、ヘイケホタルの飼育、生徒会活動としての国際ボランティアやNIEなどの多様な実践をESDに位置付けて全校体制で取り組んでいる。

### 小学校賞 … 宮城県角田市立東根小学校

木造校舎増築を機に地元の豊かな木材、森林資源に注目させESDとしたユニークな実践。森林資源の大切さについて体験活動を通して学習するとともに、そこで習得したことを保護者や地域住民に発信している。

### 中学校賞 … 奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校

学校の置かれている地域の特性を生かしたESDを地域ぐるみで実践。地域の文化や自然環境についての学習を福祉活動やものづくりを通して行うなど地域の学習環境、教育資源を効果的に活用している。

### 高等学校賞 … 愛知県立豊田東高等学校

ESDの視点にたった英語教育の実践。単に語学力の向上を図る英語教育に留まらずESDの目標にそった教材を扱い、環境問題、貧困、平和、人権などの課題に関する理解と活動に結び付く実践となっている。

### 審査員特別賞 … 宮城県気仙沼市立面瀬小学校

ESDで育む資質・能力として「主体的に学ぶ意欲」、「思考力・判断力・表現力」を中核に据え、環境教育を軸にした教育活動に地域と連携して取り組み、その成果を地域へ発信している。

## 持続発展教育（ESD）大賞

東京都江東区立八名川小学校  
手島 利夫

### ESDを中心とした学校づくり（その実践と発信）

江東区立八名川小学校は、徳川家康の江戸開闢以来400年続く東京の下町にあり、開校96周年の歴史を誇る学校である。児童数は370名、12学級を有している。

学区域には松尾芭蕉さんが奥の細道の旅に出発した芭蕉庵跡が残るなど、歴史を感じさせるものも多くあるが、関東大震災と東京大空襲の2度にわたって、ほぼ壊滅的な打撃を受け、そこから復興してきたたくましい町でもある。

E S Dへの取り組みは今年で3年目になるが、校内研究会の講師として目白大学人間学部長多田孝志先生の継続的なご指導をいただいている。

今回のE S D大賞には「**E S Dを中心とした学校づくり、その実践と発信**」を主題に応募した。そのねらいは、

八名川小学校をモデルに、**E S Dを中心とした学校教育のあり方**を示し、その手法や成果を国内外に発信することを通して、我が国の教育が進むべき方向性を明らかにすることである。そして、ユネスコスクールのネットワーク等を活かして、**E S Dを国内外に広める可能性への認識を共有**したいと考えたからである。そして、

- ・E S Dを踏まえた教育課程の編成
- ・N e w ! E S Dカレンダーの開発（教科横断的な指導計画の作成）
- ・子どもの学びに火をつける（問題解決的な学習過程の工夫）
- ・全校E S D交流会「八名川まつり」の実践
- ・実践の公開と発信

等をキーワードとして、次のように工夫して実践を進めてきた。

#### ①E S Dを踏まえた教育課程の編成

学校教育は組織的・計画的に行うべきものだから、教育課程をしっかりと見直し、学習指導要領を踏まえ、その中にE S Dの理念を文言としてき

ちんと位置づけることが一番重要である。これがないと、E S Dに興味がある者だけが取り組み、あとの職員は無関心などという状況が生まれてしまうのである。

そのためには、年度末の学校評価や、新年度計画の編成の際にきちんと方向性を示し、全校の理解と合意のもとでE S Dを踏まえた学校づくりを進めたいものである。

八名川小学校では校内の職員会議用にはE S Dに関係ある部分を太字で印刷し、職員が意識をもって新年度を迎えられるよう、工夫をしている。

#### ②N e w ! E S Dカレンダーの開発

学習指導要領では、教科で学んだ知識を様々な場面で活用する能力の育成が求められている。それは単なる知識を積み上げる学びから知恵を育てる学びへの転換でもある。

激しい変化が予想される世界で生きていく子どもたちである。従来と同じ学びだけでは変化に対応できる力が十分に育たない。そこで、学びをつなぎ、関連づけ、発展的で深化する学習を作り出す必要がある。しかし、教科の授業時間だけでは十分には実現できないのが現状である。

だからこそ、教科横断的な学びの必要性が言われてきたのである。しかし、そのような学習体験の乏しい教師にはその必要性も理解できず、教科横断的な学習のイメージももてなかったのである。

それは私自身を振り返ってみても同様であった。それを打ち破るものがE S Dカレンダーであり、そこに単元展開の基本的内容を合わせて示したのがN e w ! E S Dカレンダーであった。本校はこれを開発し、普及に努めてきた。

これは、各学年の生活科や総合的な学習の時間の年間指導計画案であると同時に教科横断的な学習の設計図にもなっている。そして、これはその学校のE S Dの年間指導計画にもなるのである。

#### ③子どもの学びに火をつける（問題解決的な学習過程の工夫）

従来も「自ら進んで学ぶ児童の育成」については重視されてきた。しかし、それは教師が出す課題に対して積極的に「自ら・進んで」取り組むことのできる子どもを求めていたように思う。

そこに、子ども自身の内発的な問題意識があるのかどうか重要なのである。

八名川小学校では2年間の取り組みの中でも「事実認識を深める」「問題意識を集約化する」「学習問題を明確にする」等、7つの見出しを使った学習過程を工夫し成果をあげてきた。しかし、教師にとっては、理解しにくい言葉でもあった。

そこで、「学びに火をつける」「調べる」「まとめる」「伝え合う」という4段階の流れをつくり、特に「学びに火をつける」際に、①問題に気付かせる、②火をつける、③テーマを決める、というステップを意識させることで、児童の問題意識を掘り起こせるようになってきたのである。

「子どもの前に知識という薪の山を築いても一人前の教師ではありません。これからの学校教育では通用しません。それに火をつけて子どもの心を燃え上がらせて初めて一人前の教師と言えるのです。」「あなたは、どうやって火をつけるつもりのですか。」「それで本当に火がつかますか。」「どんな燃え方をするかなあ。」などと声をかけながら、単元展開表の作成に取り組んできた。

例えば、6年生の「八名川の歴史王になろう」という地域の歴史や文化を調べ語る学習では、1年目にはゲストティーチャーによるガイダンスの後に、教師が用意した6つのコースから児童に選択させ、グルーピングして追究を進めた。

翌年には、当時の江戸前の寿司を復元したものを持ち込み、「S U S H I」と言われるほど世界的な食文化がこの町で生まれたきっかけや工夫を示し、「他には、どのような文化がこの町に生まれてきたのか調べたい」という問題意識を掘り起こした。

本年度は、プラタモリやタイムトラベラー等の番組を利用しながら、様々な歴史的な事実や問題に気付かせ、そこで得た知識を元に保護者に向け

た「八名川歴史クイズ」を作成し、その得点結果の集計をグラフで示すことで「この町に住んでいるのに、大人なのに、町の歴史についてわかっていないなあ!」という驚きと、「僕たちが調べて教えてあげないとだめかなあ」「少なくとも、私たちは自分の町の歴史を語れるようになりたいね」という意欲や問題意識が育ったのである。

持続可能な社会を創る上で最も重視されるのが問題解決能力だと言われている。そして、その能力は問題解決的な学習活動を抜きにして育成することができないのである。

また、問題解決的な学習指導のできる教師も、自分で問題解決的な指導を体験しない限り、その指導法を身につけることはできないのである。ここに、E S Dを推進する上での課題もあるが、これを解決することは日本の教育を大きく改革し、日本の未来を明るく照らす希望の火だと思うのである。だからこそ、E S Dに取り組む学校を少しでも増やし、全国に普及させていかななくてはならないのである。

#### ④全校児童によるE S D交流会（八名川まつり）を設定し、児童の発表・交流の場を年間指導計画に位置づける

3年前の八名川小学校には、「八名川まつり」の名で特別活動として遊びの交流をする時間があった。それは、牛乳パックを使った「ワニワニ・パニック」であり、磁石を使った「魚釣りコーナー」であり、6年生の「お化け屋敷」であった。

このまつりの見直しを図り、学びと結びつけることでE S Dの学習まつりに変えてきた。

どのように進めたらいいのか、教師の方が不安そうであったが、全校児童に向けて考え方や進め方、楽しさや価値などを伝え、やる気を引き出すことで定着させることができた。

2年目の今年は、保・幼・小・中連携教育の授業公開にも当て、来校者を増やし、園児から保護者、地域の方々、学生や教師、E S D研究者から教育行政の担当者まで多様な人々が交流する場となりつつある。開催案内はユネスコスクール公式ホームページにも載せていただいた。

今年度は1月22日（火）の実施予定である。





## ・洗足池と生きる

洗足風致協会、横浜ホタルの会、大森六中自然科学部及び農援隊が連携し、洗足池水生植物園においてホタルも自生する環境を作ることを目的とした取組を行っている。ヘイケボタルは、幼虫のとき水に棲み、さなぎで土の中、成虫になると空中で生活をする。ホタルがすむ環境は、水、土、空気がきれいであること。その環境を守るため、地域に協力する活動は、これから先この地域に住む一員として、誇りのもてる活動となる。まさしく、持続可能な社会の担い手作りである。ユネスコスクール加盟校として継続していく活動である。

### ① 農援隊の結成

本校に隣接する洗足池公園に幕末で活躍した勝海舟の夫婦の墓があり、地域の方々がその墓を守っている。本校は勝海舟の別邸跡地に建てられ、ゆかりの深い人物である。勝海舟と関係の深かった坂本竜馬が作った海援隊をなぞって作られたのが本校ボランティアで結成した農援隊（現在105名の登録）である。校内の環境整備はもとより、地域貢献のできる活動を行っていくことが目的である。生徒に地域の一員であることを意識させ、この地域が持続可能な社会になるための活動をしていく。

### ② ホタル復活プロジェクト

平成23年1月洗足池にホタルを復活させるためのプロジェクトが始まった。

まず、水生植物園を大田区まちなみ維持課と洗足風致協会が協力して造園した。農援隊約63名が集まり、水生植物を植えた。すべて植え終えた後、清水窪湧水を引き入れて、入水し、ホタルもすすめる環境を作った。



水生植物園完成

平成22年10月から横浜ホタルの会の丸茂氏から譲り受けた200匹のヘイケボタルの幼虫を自然科学部の生徒が校舎内で飼育した。初めて見る幼虫は2、3mmの大きさでごみと間違えて水道に流してしまうという失敗があった。9ヶ月間育て、平成23年6月に150匹の幼虫を、水生植物園に放流した。



ホタル放流式2011

その7月に1匹光を放ったホタルが確認され、大いに喜んだが、自生への道は遠いことを感じた。ホタルが自生するためには、まず、幼虫のすすめる水質の改善が必要で、昭和の初期に都市計画で川や池がコンクリート化し、ホタルが絶滅した後、洗足池ではアオコが発生したことから、水質を管理するために浄化装置を設置した。そのおかげで、水質は安定し自然科学部が水質検査をしても落ち着いた数値が続く。



ホタル放流式2012

平成23年9月から、今度は400匹の幼虫を譲り受け、校舎内で飼育した。今度は慣れたこともあり失敗もなく、400匹をそのまま放流することができた。成長もよく、ほとんどが1.5cmほどに大きくなり、7月には100匹以上が光を放ち、地域の人に喜ばれた。その中で、「夜ホタルを見るのが楽しみで、毎日来ています。」との声に、喜びを感じた。



ホタルを見て喜ぶ地域の方々

自生するまでにはまだ数年かかると思われるが、活動の継続が、大切であると考え。

### ③ 洗足池の生物多様性

ホタルの幼虫は、水中で生活し、さなぎで上陸し土の中で過ごし、成虫で外にでて、光を放つ。その環境を作ってやるために、洗足池に水生植物園を完成させた。

現在、洗足池の問題となっているのは、外来種による生態系の乱れである。外来種は、ペットとして飼いきれなくなって池に捨てたものと考えられる。

熱帯魚のミッキーマウスプラティやアリゲーターガー、ミシシッピーアカミミガメ、かみつぎガメ、ワニガメ等が、みつかったのもその例である。

どこの生態でも問題になっているブルーギルが例に漏れず多く生息している。外来種により、もともといた生物が生存競争で負けてしまい、外来種が増え、もともといた生物がさらに減る。つまり、生態系を崩すことになる。

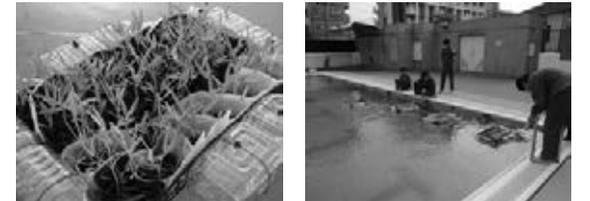
外来種の侵入により、遺伝子の汚染が進み、その地域にない病気を持ち込み、周辺の生物に感染させてしまう。現在の洗足池は、生態系は崩れていないものの、姿を見なくなってしまった生物がいる。

ホタルの放流についても、やたらに放流しても良いのかという意見をいただく。混在した形で放流すると遺伝子的観点からもゲンジボタルの移植に警笛を鳴らしている。その点、ヘイケボタルは遺伝子的な問題は少ないとされ、また、ホタルの移植について、三原則が提案されている。その中の1つ「自生のホタルが絶滅し移植を試みる場合は、最も近い水系のホタルを導入する」ことが、本校の活動にあてはまり、生物多様性を保つことができている。（平成20年6月6日法律第58号生物多様性基本法による）

洗足池周辺の環境を知り、さらにホタルもすすめる環境づくりのために、洗足池の水質検査を進めている。生物の住みやすい環境であるかを調べたところ、浄化装置の凝集剤として、使用されているポリ塩化アルミニウムが、水生生物への毒性を持つことがわかり、水質規制には、引っかけられないものの、他の河川より、高い濃度が検出された。

ヘイケボタル生息環境では、維持用水として、水処理施設で処理した池水を利用しており、当該環境で、ヘイケボタルの幼虫のえさである、サカマキガイが見られない要因として、アルミニウムを含む処理水の注入が上げられる。

そこで、東日本大震災で津波に襲われ、塩害で大きな被害を受けた田畑に、空芯菜を植えたところ、改善されたという報告があり、早速、本校のプールで育て、実験することにした。



プールに浮かべた空芯菜

最初はペットボトルで育て、水質検査を行ったところ、改善が見られ、プールにいかだ状で育て、



洗足池に浮かべた空芯菜

水質を検査した。洗足池でも同様に水面に浮かべ、調査している。冬には弱い植物なので、今後冬も枯れない植物で挑戦する予定である。

### ④ 生徒会の取り組み

毎週金曜日、始業前に生徒会がボランティアを募り、洗足池清掃を行っている。毎回100人を越える生徒が朝早く集まり、周辺のゴミ回収を行っている。また、夏休みには小中一貫教育の取組みで、小学生と一緒に清掃活動を行う。地域を大切にしようという気持ちが育っている。

### ⑤ ボート教室

夏休みの体験を重視した活動（夏のわくわくスクール）として、ボート講習会を開いた。洗足風致協会事務長守屋氏に講師を依頼し、洗足池で、手漕ぎボートのこぎ方を教わる。22年度は中学生のみ、23年度からは小学校4年生以上の参加を募り小中合同で行っている。小学校4年生は中学生と共にボートに乗り、交代でこいだ。小学生は中学生に教えて



洗足池に浮かべた空芯菜

もらうことで上級学校への期待、中学生は小学生に教えることで責任を感じながら参加している。ボート講習会は、夏の水に関わる事故防止目的であるが、小学校と中学校の連携行事として続けている。



ボート教室

#### ・校内環境整備

##### ① ミミズコンポスト

本校の校庭には、落葉広葉樹が102本ある。秋になると、落ち葉はきを毎朝ボランティアによって行って来た。2年前までは大量の落ち葉をゴミとして出していた。そのゴミを利用できないかということで考えられたのが、コンポストである。

ミミズが落ち葉を食べて、腐葉土にするコンポストは、ミミズは六中には大量にいるので、コストがかからない。そこで、枠組みを農援隊と本校用務主事によって製作した。ミミズが生きていくための湿り気を確保するため、底にビニールシートを引いた。多少の土とミミズ、そして枯葉をコンポストに入れ、たまに空気を入れるために、ひっくり返す。ようやく完成したコンポストだったが、



ミミズコンポスト



チューリップ植え付け

本校の枯れ葉は瞬く間にいっぱいになった。できた腐葉土で、苗を育て、ゴーヤのグリーンカーテンを作り、エアコンの使用が減り節電に貢献した。また、入学式の新生にチューリップをプレゼントするため、プランターに腐

葉土を敷き球根を植えて育てている。

##### ② ゴーヤグリーンカーテン



ゴーヤグリーンカーテン

ミミズコンポストのできた腐葉土で全校生徒がゴーヤを育て、2学期の給食で食材として使い、食育を行っている。夏休みの全校生徒による水やり当番表は、大森六中の宝ものになっている。

##### ③ 朝の落ち葉はき、あいさつ運動



校庭落ち葉はき

毎日始業前に読書時間を設け、1時間目から落ち着いた生活をスタートさせたいという試みと同時に、秋にはたくさんの落ち葉が校庭を埋め尽くし、7時45分から自主的に落ち葉をはくことで、1日がスタートする。また、生徒会があいさつ運動で校門に立つ。PTAも協力し、当番制ではあるが毎朝あいさつがこだまする。

##### ④ 植物名札づくり



メタセコイアの前で

校庭にある樹木263本に名札をつける作業は、作成した自分の名前がこの先残るので、楽しい活動となった。植物名、科名、特徴を書いた札を樹木に銅線でくくりつけたことで、生徒にとって校庭の自然がより身近になった。

##### ・農育から学ぶ一人と人とのつながりを大切に

12年前より3年生の修学旅行では、岩手県花巻市石鳥谷町の農家に泊まり農業体験を行う。家族同様に過ごすためにたった1泊にもかかわらず、別れの際には涙を流す生



修学旅行農業体験

徒が多い。交流は修学旅行だけでなく、野菜や米を積んで本校の文化祭にバスで来てくださり、販売する。保護者に好評で、あっという間に売り切れる。そんな心の交流を大切にしていることも、持続可能な社会の担い手作りに役立っていると感じる。卒業後も折々に連絡を取るなどのつながりが続く生徒も多い。

##### ① 東日本大震災による風評被害に立ち向かう

平成23年3月11日東北地方を中心に大地震が発生し、交流のある石鳥谷町も大きな被害を受けた。数週間ライフラインが途絶えたものの、内陸にあるため、津波による被害はなかった。しかし、放射線の影響を心配する声が高く、東北地方の修学旅行が激減した。本校も平成23年度の修学旅行は新幹線が予約できる状況にないことで、急遽京都方面に切り替えた。そこで、平成24年度の修学旅行は東北修学旅行を実施するために、保護者会を2回開いた。また、東京工業大学の鈴木教授による放射線についての講演会を生徒と保護者、地域の方対象に行った。保護者会の2回目は岩手のJA花巻からお2人の方に来ていただき、放射線の影響はまったくないこと、農作業中の配慮は十分に行うことなどを説明していただき、保護者も安心し納得した上で、実施することができた。東北地方の修学旅行を実施できたことは、復興支援につながることでありと考えている。

さらに、修学旅行先で、被災された語り部の方に、地震の起きたときの状況を聞くことができた。生徒にとっても衝撃的な話もあり、改めて自然災害の怖さを感じた。

##### ② 応援メッセージ

生徒会が呼びかけ、つながりの深い石鳥谷町に向けて応援横断幕を全校で作った。生徒一人一人のメッセージを書き込み、完成した横断幕は、現在石鳥谷町役場に飾られている。また、被害の大きかった気仙沼市立大谷中学校と交流を持ち、生徒からの応援レターを



岩手県応援横断幕

送ったところ、ビデオレターが送られてきた。復興が滞り、進路が決まらない切実な思いがその中で語られている様子を見て、改めて震災の影響の大きさを感じた。今後も交流を続ける。

##### ③ 農業検定から学ぶ

日本農業検定協会主催の農業検定を2年生が受けている。農業、食育、環境問題に関心を持ち学習したうえで、3級の資格を取る。

##### ・社会で活躍されている方からのお話

ユネスコスクールに加盟したことは、今後の生き方を考える上で、多くの方からお話をいただく機会を増やしている。1月にユネスコ講演会、3月に卒業記念講演会、6月に開校記念講演会、朝礼時に毎学期1回地域の方のお話を伺う。ユネスコ前事務局長である松浦晃一郎氏のお話は、将来世界で活躍するために必要なことを教えていただいた。本校にゆかりの深い勝海舟、玄孫の高山みや子氏より、咸臨丸にまつわるエピソードなどを聞き、生徒は大いに関心を持った。

##### ・校内研修（ESDカレンダー）

本校では校内研修で3つの分科会を開き、研修を行っている。「ESDの価値観」「コミュニケーション能力」「体系的な思考力」を伸ばすため分科会で研修した。また、ESDカレンダーを作成し、生徒に示した。

##### ・まとめ

さまざまな大きな問題や課題に対し、若い柔軟な考えで対策を考えようという姿勢や、道を切り拓いていこうとする力を少しずつではあるが培うことができた。課題を見つけ、その解決の道を探っていくには、まず状況を知り、考え、実践するという流れが必要である。生徒は今の自分たちに関わることから、この流れを学ぶことができたのではないと思う。これは、「ESD＝持続可能な社会の担い手をはぐくむ教育」につながり、またその結果、自分たちでより良い社会をつくることのできるという自己肯定感や自己有用感による自信から、生徒に夢と希望を与えることができるものと考えている。

# 小 学 校 賞

宮城県角田市立東根小学校  
馬場 達也

## 「木造校舎ができるまで」

### 1 はじめに

本校は、2009年8月に「ユネスコスクール」に加盟し、それ以降、持続発展教育（ESD）の充実を教育活動の重点目標に掲げ、その具現化に取り組んでいる。それ以前も、持続発展教育に関わるさまざまな活動を行なっていたが、これを機により積極的な活動を行うようになった。

そんな折、平成23年度に、地元の木材を使用して、本校に木造校舎が増築されることが決まった。これは、本校児童に、森林資源の大切さや地球環境に与える影響を学習させる良い機会と考え、持続発展教育の一環として取り組んだのが、この活動である。

### 2 ねらい

児童に、伐採から植林までの流れを身近に体験させることで、資源循環と森林循環の仕組みを学ばせ、さらに、他学年の児童や保護者、地域住民に実践の様子を伝える活動を行なわせることにより、ふるさとの環境を末永く守り育てていこうという心を培おうとするものである。

#### <活動目標>

地域の自然を理解し愛着を持つことで、環境を守り育てていくことの大切さを理解する。

### 3 活動の概要

#### (1) 指導計画

第3、4学年の「総合的な学習の時間」を中心に活用し、年間30時間で次の学習活動を行うことにした。

- ①木材使用の意義を学ぶ。
- ②伐採から製材・工事までの過程を見学し、まとめる。
- ③どんな人たちがどのようにして地元の森林を守

り続けてきたかを知る。

④植林作業（全校児童参加）を行う。

⑤学習内容をまとめ、他学年の児童や地域の人々に伝える。

#### (2) 活動の流れ

段階	学習課題	活動内容
問題意識をもつ (1)	地元の木材を使って、どのように校舎はつくられていくか調べてみよう	校舎の増築にあたり地元の木材が使われることを知らせ調べてみたいことをもとに学習計画を立てる。
調査する (11)	どのようにして木材がつくれ、使われていくか調べよう	木材が伐採されてから実際に使われるまでの過程を調べる。 ①伐採地見学【2010年12月】 ②伐採の見学【2011年1月】 ③搬出・玉切り見学【2011年6月】 ③製材所見学【2011年7月】 ④工事現場見学【2011年11月】

	木を切った後の森林はどうなっているか調べよう	どんな人たちが、どのようにして、地元の森林を守り育てているのかを知る。 ○森林を守っている地域の人の講話【2011年11月】
まとめる (13)	これまで学習してきたことをまとめよう 以下の観点でまとめる。 ○自分たちが住む地域の環境の良さに気づく。 ○環境を守ることの大切さに気づく。 ○身近なことで、自分たちができることは何かを考える。	学習したことをまとめ、周りの人たちに伝える準備をする。 ①新聞づくり 調べたことを新聞にまとめ、他学年の児童や地域の人たちに知らせるときに活用する。 ②運動会での表現「新校舎完成」 木材を伐採、製材し、校舎が完成するまでを組体操で表現する。 【2011年10月】
実践する (5)	自分たちのできることをやってみよう ○植林作業を行う。 ○学んだことをみんなに伝える。	①植林作業（全校）（学校行事3時間）【2012年5月】 ②まとめたことを、他学年の児童や保護者、地域の方々に伝える。 【2012年6月】

## 4 実践の様子

### (1) 伐採する森林の見学（2010年12月）

初めに、児童に木材を切り出す前の森林の様子を観察させた。学校から1.5kmほどの場所にある森林で、60年ほど前に児童の祖父母たちが植林し育ててきた森林である。この森林の木を使って新しい校舎を作ることを理解させた。

#### 【児童の作文から】

山林の杉の木を見た後は、植物がおいしげる所を下ってきました。足もとに気をつけながら下ってきましたが、木の枝がいっぱい飛び出していたので大変でした。

それほどすごい山の木が私たちの校舎に使われるのです。そんな山に登って木を切っている人たちの大変さがわかりました。この木が大きくなるには60年かかるそうです。



<木材を切り出す森林の見学>

### (2) 伐採の見学（2011年1月）

木材の伐採作業が始まったので、その様子を見学させた。実際に大きな木が切られて倒れていく様子を見せ、校舎を建てるために、「生きている木」が使われることに気付かせた。

#### 【児童の作文から】

チェーンソーで切られて、木がたおれると「ドカーン」と音がしました。木は一日に70本切られます。山から切り出された木は、必要な長さに切り取られます。

木は何本も切られていき、しだいに山の木が少なくなっていました。

新校舎に使う木は55才くらいです。30メートルから40メートルくらいの木が2000本も切られていきました。



<チェーンソーで切り倒される木々>

(3) 搬出・玉切りの見学 (2011年6月)

森林の中で切られた木々が、山から適当な大きさに切れ、運び出される様子を見学させた。

【児童の作文から】

平成23年の夏、森林から切り取られた1本1本の木材がさらに短く切り取られる作業を見学に行きました。「玉切り」というそうです。

その日は、とても暑くて立っているだけでもあせが流れてきました。そんな中、2人の人が作業を行っていました。

短く切られた木材は、切られた場所から200～300メートルはなれた所に運ばれていきます。それがくり返し、くり返し、暑い中行われるのです。



<木材を運び出す通路>

(4) 製材所の見学 (2011年7月)

森林から切り出された木々は、製材所に送られて、いろいろな形に加工される。1本1本の木をできるだけ無駄なく利用しようと、作業が進められているところを見学させた。

【児童の作文から】

わたしたち4年生は、切り取られた木を製材す

る所を見学に行きました。

木を校舎のいろんな場所に合うように、何度も調整して切っていました。その時に、落ちる木の粉を「おがくず」というそうです。「おがくず」を取る時は、シャベルを使います。牛を飼っている人が、その粉を買って牛舎の床にしくのだそうです。東根の木材は、無駄なく使われていることがわかりました。



<木材の加工の仕方についての説明>

(5) 運動会で組体操「新校舎完成」を発表

(2011年10月)

地区民合同運動会で、「木が育ち、それを伐採し、製材し、新しい校舎を建てていく様子」を組体操にして発表した。

完成した新校舎を思い描き、その校舎への期待と、大切にしていこうという気持ちを高めることができた。



<組体操「新校舎完成」の一場面>

(6) 工事現場の見学 (2011年11月)

製材所で加工され、工事現場に運び込まれてきた木材がどのように使われているかを見学させた。

使われる場所によって、さまざまな形の木材があることやそれらが安全で丈夫な建物を建てるために工夫されていることを理解させた。

【児童の作文から】

長い木材の先はでこぼこしていて、穴にはめる事ができます。ななめに切られた木材は、「木うちばり」といい、屋根や柱を支える部分になります。木材の小さな穴の部分には、ボルトを差し込んで組み立てていきます。

じょうぶで安全な校舎を作るための構造になっているのは、本当にすごいです。



<工事現場に運び込まれてきた木材>

(7) 全校での植林作業 (2012年5月)

東根小学校の新校舎を作るために少なくなってしまった森林の木をもとに戻そうと、全校児童で植林を行った。

はじめに、東根財産区管理委員会委員長の遠藤秋雄さんに植林の仕方や東根財産区の森林のことを説明していただいた。児童は、遠藤さんが長年にわたってこの森林を守ってきた話を聞くことにより、地域の方々の森林への思いについて深く感じ取ることができたようだった。その後、東根財産区管理委員会や仙南森林組合の方々に指導していただきながら、各学年2人1組になり、全部で100本のスギの苗木を植えた。この作業を通して、協力し合う大切さも体験できたようだった。最後に、植えた苗木のそばに自分の名前を書いたくいを立て、作業を終了した。

児童は、これから60年後の森林の様子に思いをはせると同時に、自分の植えた木が大きく育つことを願っていた。



<植林の仕方の説明>



<2人1組での植林作業>

(8) 特別教室棟児童内覧会 (2012年5月)

特別教室棟が完成し、全校児童がスギの香りに満ちた新しい木造校舎を見学した。

新校舎の視聴覚室で、新しい校舎の使い方を学習した後、昨年度の校長先生が増築記念にくださった「ハナミズキ」の木の記念植樹も行った。

これまでの活動を思い起こしながら、これからこの新しい校舎を大切に使うことを誓いあった。



<新校舎で、前校長先生と>

(9) 地区民内覧会 (2012年6月)

角田市教育委員会が主催して、東根地区の住民に特別教室棟のお披露目をした。100人ほどの地区



暑い季節、臭いにおいのするアルミ缶をつぶす作業や毎月回収袋を持って坂の多い地区内を十数件配って歩く作業など大変さもある。だが、アルミ缶回収で得た利益で購入した車椅子が施設に贈られていることが、生徒たちや地域の誇りとなっている。地域の協力に感謝し、初心を忘れないように振り返り、意欲づけをしてきた。生徒も認めてもらうことで、達成感を感じてきた。地域あげでの取り組みは、今年、17年目になり、車椅子寄贈が100台を突破する。コツコツと積み上げてきた成果と喜んでいる。



皆さんのおかげで、贈ることができました。感謝！

## (2) 心を響かした「銀色の輪」

生徒の自主的な活動から始まった取り組みだが、その活動を前進させた出会いがあった。福井千賀子さんである。福井さんは体が不自由で、車いすに乗っておられる。アルミ缶回収で車椅子を購入できることを知り、老人ホームに贈りたいと一人でアルミ缶拾いを始められた。お母さんの協力のもと、車椅子でボランティア活動を続けられた。その運動が大阪から全国に広がり、彼女のもとに、アルミ缶がたくさん集まり、5年間で車椅子を施設に100台贈られた。「銀色の輪」という本を著され、映画「ポコ・ア・ポコ〜一步一步ゆっくり進もう〜」になっている。本当にゆっくりとではあるが、彼女の一步の力は大きい。本校もアルミ缶の活動をするようになって、彼女を知り、道徳で学んできた。12月20日に車いす寄贈100台を記念して、福井さんを招き「車椅子のルーツを探ろう」を開催する。福井さんも、本校の活動が続いていることを喜んでくださり、出会いを楽しみにしてくださっている。生徒や地域の方に想いを語ってくださる。人とのつながりの大切さや福祉、人権について学ぶ。

## (3) アルミ缶リサイクル工場見学

1年生は、中学校へ入学すると、自分たちが集めているアルミ缶が、どのような処理工程を経てリサイクルされているかを学ぶため、アルミ缶搬入工場を見学する。このリサイクルが環境保護にどんなに有効かを科学的に学び、地球温暖化の原因になる二酸化炭素を減らしていることを実感。回収活動の意欲付けになっている。

リサイクル作業で、塗料を除去する工程があるから、アルミ缶の色が混ざらないんだね。

アルミ缶をリサイクルするって、環境にとっていいことなんだなあ。

もっとリサイクル率が増えたらいいな。僕たちもアルミ缶回収をもっと頑張ろう。

僕たちが集めたアルミ缶は、あんなにいろんな作業を通して再生されるんだ。



## (4) ユネスコスクールの仲間とのつながり

ふるさとの良さに気づき地域の方と共に継承していこうと、2009年にユネスコスクールに加盟した。新たに何かを仕掛けるのではなく、長年月ヶ瀬中学校がやってきたふるさと学習や環境学習をESDという柱でまとめ、深化、統合できると考えたからである。奈良市は世界遺産を有する古都。歴史や文化を千三百年間、受け継ぎ守ってきた。月ヶ瀬は世界遺産には登録されていないが、受け継ぎ守るべき大切な心・伝統・誇りがある。そこでASPネットワークの仲間と繋がった。都南中学校・三笠中学校・平城西中学校とTV会議を行い、学校を訪問し合い、活動を発信している。都南中学校はエコキャップを集め、開発途上国へのワクチン支援を進めている。本校のアルミ缶回収を紹介し、お互いの支援活動を進めている。定期的に訪問し合って交換し友好を深めた。



アルミ缶とEcoキャップを交換！

## (5) アルミ缶から環境を考える・発信

地域あげでの福祉・環境保護運動に発展した運動を生徒が「奈良県環境フェア」「奈良市教育改革フォーラム」「ユネスコ全国運動大会in奈良」「月ヶ瀬福祉フェスティバル」で発表した。紹介する。

### 1. アルミ缶回収活動のはじまり

- 平成8年度の生徒会の取り組みがスタート。

世界じょうの人々の幸せと、地域の福祉のために、自分たちができることから始めよう！



- 先輩から後輩へ、17年間受け継がれている。

### 2. アルミ缶回収活動の目的

- アルミ缶回収を通して、環境保全の重要性や資源の有効利用を学習する。
- アルミ缶を回収して車いすなどの福祉機器を贈呈する。
- 自分たちができるボランティア活動を行い、地域の福祉に貢献する。

### 調べてみると・・・

- アルミ缶→アルミ地金1kg発生する二酸化炭素の量は 0.296 kg

- ポーキサイト→アルミ地金1kg発生する二酸化炭素の量は 7.40 kg

アルミ缶1kgを集めることで削減できる二酸化炭素の量は 7.40kg - 0.296kg = 7.104kg

なんと7.104kgもの二酸化炭素を削減できる!!!

### 平成24年度の実績(12月現在)

- アルミ缶重量 2,170 kg
- 収益 217,000円
- 福祉施設へ、車いす等の福祉機器4台を贈呈。
- 二酸化炭素削減量 15,416 kg

### 平成24年12月までの累計では・・・

- アルミ缶重量 5,436,030kg
- 収益 5,162,804円
- 福祉施設へ、車いす等の福祉機器 102台を贈呈。
- 二酸化炭素削減量 38,617,557kg

この数字は、一般家庭の約6.5年分の二酸化炭素排出量に相当します。

(全国平均排出量は1人1年あたり約1.5t)

### まとめ

アルミ缶回収は17年目を迎えた。私たちも地域も、取り組み当初の新鮮さを失わないでいくことはとても難しい。

今、温暖化をはじめ、地球規模での環境問題が注目を浴びている。学校で取り組んだことを元に、家庭や地域で環境問題解決のために取り組むことが大切。

アルミ缶回収を通して、環境問題への取り組みがすなわち、地球上のすべての人々の人権を守る取り組みであることを学んだ。

### お礼

毎月アルミ缶を提供してくださる「地域」のみならず、アルミ缶を回収して下さる「愛歩21」のボランティアの方々に心から感謝します。これからも、ご協力お願いします

全国環境美化教育優良校特別賞、県社会福祉奉仕活動表彰等いただきました。地域あげでの賞です。



## (6) 回収実績

コツコツ続けた17年間の実績の一部を紹介する。

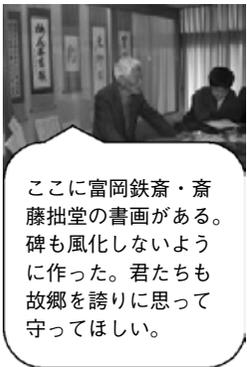
年度	回収量	Co2削減量	金額	寄贈番号
平成8年度 6～3月	2.99 t	18.40 t	224,250円	1～4
平成24年度 12月迄	2.17 t	15.41 t	217,000円	98～102
17年間 累計	5,436 t	38,618 t	516万 2,804円	1～102台

## 2. ふるさと遺産学習

アルミ缶回収活動とともに、地域学習の柱としている取り組みはふるさと遺産学習である。ふるさとをフィールドワークし、歴史・文化・自然を体感、郷土の良さに気付く。以前も行われていたが6年前より再開、プログラムを立て取り組んだ。これは、郷土史家で、元校長の稲葉長輝先生の想い「月ヶ瀬のことを若い人に知ってほしい、良さに気付き守ってほしい。」に起因する。92歳の先生が案内して下さった。歴史、自然、文化、伝統の数々。現在は地区ごとにボランティアガイドがいてくださる。地域の子どもたちに惜しめない協力をしてくださることに感謝する。

### (1) ふるさと講話

故郷学習の導入に、地域の方を招き講話会を開催している。「月ヶ瀬を次世代につなぐ」「月ヶ瀬の良さを知り、夢や誇りを持とう」「故郷探究との出会い」「故郷の先人の生き方に学ぼう」「東郷園物語」等を行い、ふるさと学習の動機づけを行う。そこには、ふるさとの歴史のみならず、守ってきた人の生き方、活躍されている人等、どれも故郷へのアイデンティティを高めるものであった。心を響かす「全校道徳」として位置付けた。



ここに富岡鉄斎・斎藤拙堂の書画がある。碑も風化しないように作った。君たちも故郷を誇りに思ってお守ってほしい。

### (2) ふるさとWALK

総合的な学習の時間に「ふるさとWALK」として地域を4コースに分け散策、探究する。「百聞は一見にしかず」の言葉通り、美しい景観と史跡の数々、ボランティアガイドの話に引き込まれる体験となる。実際に歩くと五感を使い景色や風を感じ、郷土の良さを体感できる体験である。



地域の方に教わる、月ヶ瀬の歴史

### (3) ふるさと文化・産業体験

伝統の仕事や産業に触れ、自らも夢をもち、生きていこうとする態度を育てる。伝統文化・産業の体験活動を組み入れた。保・小・中合同で梅採



りを実施し、梅干しやシロップを地産地消。梅発祥の理由となるう烏梅を使った紅花染体験や奈良晒体験をする。もう一つの主要産業である茶は地域の茶インストラクター、茶家元に茶摘みや煎茶道、茶会を指導してもらう。その中で地域の人の仕事にかかる思いや文化の薫りを味わった。どれも、地域の支援でできた貴重なキャリア学習となった。

### 3. 地域貢献活動

ふるさと学習を通して、郷土の素晴らしさや、そこで働き、守る人たちを知り、自分たちも何かできないかと、生徒会活動として長年続けられてきた。いろいろとお世話になった地域を思いやる活動となった。

#### (1) 地域花いっぱい活動・地域清掃

地域清掃で落ち葉を集め腐葉土を作り、環境にやさしい土で花を育てる。全校花いっぱいだけではなく、育てた花を寄せ植えにして地域のバス停や公共施設に贈っている。また、地域清掃・梅林清掃を実施し、環境美化に努めた。



#### (2) ベンチプロジェクト

本校は学校林を有す。その地域材を使って、ベンチを手作りして、公共施設に贈っている。月ヶ瀬の景色を個性豊かに描き、手紙を添え寄贈した。喜ぶ顔がみられて、嬉しそうであった。



### (3) 友愛訪問

アルミ缶回収と同じく、生徒会で17年間続く活動。一人暮らしのお年寄り宅を訪問し、お話や掃除の手伝いをしている。交流の前後には手紙を送る「あったかハートキャンペーン」を続けている。このような体験を通し、お世話になった地域を思いやる心を育てていきたい。



## 4. ふるさと発信

小集団で育つ生徒ではあるが、自分たちの学びに自信をもち、視野を広く広げようと内外に発信している。

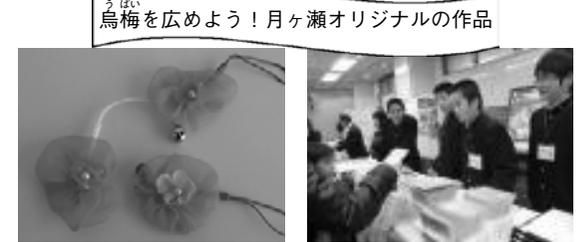
### (1) ユネスコとの繋がり



ASPネットワークでは同世代との交流を進める。ユネスコスクール間のTV会議や子どもキャンプでESD活動の研修を深めている。

### (2) 紅花プロジェクト

新たな発信として、3年前より、地域強化プロジェクト「紅花プロジェクト」を展開。梅発祥の理由となるう烏梅を使った紅花染を再興し商品を開発、地域活性化を図る。これは文部科学省のプロジェクトでもあり、地域・学校・奈良市が一体となり進めてきた。今年は、小学生・大人にも呼びかけ、交通安全運動で紅花染しおりの啓発運動を行った。地域に輪を広げたい。



### (3) 国際理解・交流

3年前のACCU韓国使節との交流から始まり、今年8月は慶州使節団と交流会を実施。部活動、茶道、チャンゴ演奏など交流した。生徒は英語やハングルを使ってアルミ缶回収活動を発信した。いろいろな機会に異文化共生の学びを続けている。同世代の子ども同士、打ち解けて楽しく交流した。



## 5. まとめと課題

これら一連の活動は、時代に応じて多少の変化はしてきたが、息の長い活動である。「郷土を知る→体験→行動→世界へ」を地域ぐるみで実践。地域との連帯感と絆を大切に、地球環境保護、伝統文化、福祉・ボランティア活動を行うことができた。生徒が目を見守り、郷土の美しさ、歴史の深さ、偉大な先人の生き様、人情の深さに触れ、郷土に誇りを持てたことは学校評価アンケートにおいても立証された。温かい支援の賜物である。バラバラな活動としていたことをESDの視点でとらえ直し、本校の基本的な柱として再構築できた。またユネスコスクール加盟で視野が広がった。

今後は、主体的に取り組む力や発信力を伸ばすことである。奈良のESD「自然とつながる 人とつながる ものとつながる 歴史とつながる世界とつながる 未来へつなげる」で取り組みたい。

# 高等学校賞

愛知県立豊田東高等学校  
奥田 紀子

## 「ESDの視点を取り入れた英語授業の実践」

### 1. はじめに

#### (1) 本校の概略

本校は大正13年に挙母町立挙母高等女学校として設置されて以来、90年近くの歴史がある。その後平成19年度に男女共学の総合学科として現在の場所に転移され新たなスタートをきった。学科改編以前の普通科には「国際コミュニケーションコース」があり、海外修学旅行、オーストラリア姉妹校交流が行われ国際理解教育に積極的に取り組んでいた実績がある。

#### (2) 総合学科として

総合学科として7系列を持ち、進路希望にあわせた11のプランを用意した本校で、生徒たちは2年次より自分の夢の実現に向けた専門科目を選択することが可能になる。同じ学年、クラスの中に自分とは違った夢を持ち、そのために努力している友人がいる。身近にそのような仲間が多くいることで、生徒たちは「みんな違ってみんないい」と自然に多様性を受け入れることのできる環境にあると感じる。

#### (3) ユネスコスクールとして

平成24年に愛知県立学校として初めてユネスコスクールに登録された。地域の商店街のイベント運営に参画したり、近隣の竹林の伐採や川の調査などに出かけるなど、地域連携や環境教育にも積極的に取り組んでいる。



商店街のイベントの様子

転任者対象のオリエンテーションや全職員対象の教員研修の際にもESDについての講習があり、本校の教員一人一人に対しESDの視点を取り入れた授業や教育活動が求められている。

「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」には、国際理解教育にも非常に力を入れており、修学旅行でのマレーシア現地校との交流を計画したり現地の文化や暮らしについて調べたりしている。

その他にも、各教科や部活動で様々なESDの視点を取り入れた授業や取組が行われている。

### 2. 「異文化理解」の授業

「異文化理解」の授業は外国語プランの3年生を対象とした英語の授業であり、生徒たちの多くは英語に興味があり、外国語学部系の大学、短大への進学を希望している。必要があれば日本語を使用することもあるが、基本的に授業は英語で行われる。

授業風景



### 3. ねらい

●英語で世界遺産について書かれた文章を読み、内容を理解するだけでなく、そこから浮かび上がる問題に目を向ける。

●環境問題、貧困、平和、人権などの社会問題について様々な視点から考え、理解を深め、さらにそこから問題を自分のこととしてとらえ、「自分に何ができるか」を考え行動につなげていくきっかけとする。

●英語でのコミュニケーション能力を育成する。

### 4. 授業実践

教科書では次のような世界遺産についての文章を読む。世界遺産から浮かび上がる課題・題材は様々であり、どのテーマでアプローチをするのか現在も試行錯誤している。

	世界遺産	テーマ
4月	エアーズ・ロック	文化の多様性
5月	ベニス	地球温暖化
6月	タージ・マハル	人口過密
7月	イグアスの滝	食生活と生態系
9月	万里の長城	異文化理解
10月	セレンゲティ国立公園	生物多様性
11月	アンコールワット	危機遺産、平和
12月	ヘッド・スマッシュ・イン・バッファロー・ジャンプ	文化の多様性
12月	アウシュビッツ強制収容所と原爆ドーム	平和、人権
1月	グレートバリアリーフ	気候変動
2月	白川郷・五箇山	人とのつながり

【教科書“The World Heritage”（三友社）で扱う世界遺産】

#### 実践例 1

4月に実施したエアーズ・ロックの授業実践における単元目標、指導内容、評価基準等を以下に示す。

(1) 単元名：1. Ayer's Rock世界最大の“聖地”

(2) 単元目標

●エアーズ・ロックについて読み、オーストラリア先住民族の聖地であることを理解する。

●エアーズ・ロックは先住民にとって神聖な守るべき場所であり、オーストラリア政府も一度は登山禁止を決めたが、現在は観光客に判断が任されている。エアーズ・ロック登山の是非について、学習した語句や表現を活用しながら英語で自分の考えを伝えることができる

●会話の継続に必要なConversation Strategies [shadowing]を身につける

#### (3) 指導内容（概略）

指導内容	配当時間
Pre-reading 英文を読む前に内容について想像し興味を引き出す	1時間
While-reading 教科書の内容を理解する実際の読み	2時間
Post-reading 教科書の内容から浮かび上がる課題について扱う	2時間

#### (4) 評価基準

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

ペア・ワークやグループ・ワークに積極的に参加し、意見を交換している。

②外国語表現の能力

聞いたり読んだりした内容について、その概要や自分の考えを相手に伝えることができている。

③外国語理解の能力

本文を読み、全体の要旨を理解することができる。相手の意見を理解することができる。

④言語や文化についての知識・理解

聞いたり読んだりした内容について、賛否や理由、感想を述べるための表現を理解している。

(5) 指導内容 (詳細)

時	指導過程	学習活動	指導、留意点	主な評価の観点・評価方法
1	・会話のための表現練習 ・ペアでの会話 ・写真の描写 (グループワーク)	・シャドーイングを使う練習 ・「オーストラリア行ったことがあるか」などの質問を聞き合う ・教科書の写真を見て知りたいことをたくさん書き出す ・班ごとに発表	・シャドーイングを使用させる ・ペアを何度か変える ・時間を区切り質問数を競わせる ・後の読みにつながる良い質問は全体で共有する	・学習した表現を活用して積極的に会話や質問をしているか①② [観察] [後日スピーキングテスト]
2	・ペアでの会話 ・リスニング ・リーディング ・語彙 単語当てゲーム (グループワーク)	・前回の授業で学んだことについて会話を行う ・CDを聞き、その後黙読する ・語彙のワークシートに取り組む ・グループ活動 一人が単語を説明し、他の人が当てる	・前回の内容を思い出させる ・習った表現を使用させる ・おおまかな内容把握させる ・英英辞典を使用させる ・日本語の使用を禁止する	・未知の語句を推測するなどして読み続けているか① [観察] ・質問に適切に答えているか③ [後日筆記テスト] ・積極的に取り組んでいるか① [観察]
3	・ペアでの会話 ・ディクテーション ・リーディング ・要約	・前回の授業で学んだことについて会話を行う ・重要文を聞き、書き取る ・ペアで重要文の意味を確認する ・キーワードを使い内容を要約する	・「会話のための表現」を使用させる ・スピードを変え何度も読む ・必要があれば日本語で解説する	・推測するなど積極的に取り組んでいるか① ・学習した表現を適切に活用しているか② [後日筆記テスト]
4	・DVD ・調べ学習 インターネット ・ライティング ・ペアでの意見交換	・ユネスコの教材DVDを見る ・エアーズ・ロックに登ることに、先住民の気持ちやゴミ問題などを調べ、その内容や書いたものをもとに、自分は「エアーズ・ロックに登りたいか」について意見と理由をペアで話す	・自分の共感できる意見は書き留めさせる ・英語の表現などの手助けをする ・ペアを何度か変える	・学習した表現を活用して会話をしているか② [後日スピーキングテスト] ・積極的に取り組んでいるか①②④ [後日筆記テスト、スピーキングテスト] [観察]
5	・誤文訂正 ・フィードバック ・ペアでの会話	・ライティングの誤りを訂正 ・クラスの意見をまとめたものを読み、その感想をペアで話す	・生徒の気づきを大切に ・いろいろな意見があることに気付かせる ・何度かペアを変える	・既習の知識を活かして積極的に取り組んでいるか①②③④ [観察、後日筆記テスト、スピーキングテスト]

(6) 生徒の意見 (英語は原文のまま抜粋)

*I think that we shouldn't climb the Ayer's Rock, because to preserve national historical material is important for Aboriginal people and us. The most important thing is knowing about this issue. If people climb without knowing this issue, they throw their garbage and go on. I talked with a lot of friends about this issue in the class. It was a lot of fun. To continue conversation was a little difficult. (エアーズ・ロックに登るべきではないと思う。歴史を守ることはアボリジニにとっても私たちにとっても大切だ。重要なのはこの問題を知ること。この問題を知らないで登る人は、ゴミを捨てたりする。授業でたくさんの友達と話せて楽しかった。会話を続けるのは少し難しい) It was interesting because I heard everyone's opinions. Climbing Uluru shouldn't be forbidden. But we have to make rules. (みんなの意見が聞けて興味深かったです。ウルルへの登山は禁止されるべきではないと思います。しかしルールを作らなくてはならないと思います。) I understand the preciousness of the nature and I understand people who want to climb it. My partner selected A (shouldn't climb). That depends on how one look at it. (自然の大切さも理解できますが、同時に登ってみたい人々の気持ちもわかります。私のパートナーはA (登るべきでない) を選びました。人それぞれ違うのだと感じました。) Tourists may dump trash there, and this is connected with environmental disruption. Some people scribble world heritages. Scribbling heritages ruin world history. Climbing Ayer's Rock should be prohibited. (観光客はゴミを捨てるかもしれない。そしてそれは環境破壊ともつながっています。世界遺産に落書きをする人もいます。こうした行動が歴史を壊してしまいます。エアーズ・ロックへ登ることは禁止されるべきだと思います。)*

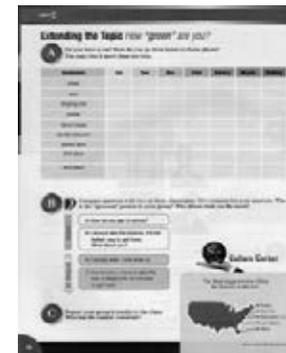
実践例 2

5月に実施したベニスの授業実践における授業実践を以下に示す。

VENICE  
水の都の物語



①“Italy”のbrain storming②教科書の理解  
③“Impact Issues2” (Longman) Unit2 Traffic Jam  
を活用。[How “green” are you?] 目的地への交通手段についてペア・ワークでコミュニケーション活動④豊田市に暮らす自分たちが車と環境についてどのような行動ができるか考え発表させる。



生徒のライティング (抜粋)

*I think global warming is the most serious problem in the world. I learned that many CO2 cause the global warming so we have to take bus or train. We have to think about what we can do to the earth. (地球温暖化が世界で最も深刻な問題だと思う。二酸化炭素が地球温暖化の原因なので、バスや電車に乗るべきだ。地球のために私たちにできることを考えなければいけない。) I learned the earth is in danger now. We should turn off the light when we are not in the room, and reduce the garbage. I think not eating so much is good for earth too. I think we should save the earth!! (地球の危機だと学んだ。部屋にいないときは電気を消す、ゴミを減らす。食べ過ぎないことも地球に良いと思う。私たちが地球を救うべきだ。) This solution depends on individual. Individual effort may seem to be very small, but when united, can help reduce global warming. (解決法は個人だ。一人一人の努力はとても小さいかもしれないが、合わせれば地球温暖化を減らすことができる。)*

実践例 3

行事や残したい伝統、「私のまちのたからもの」を題材にグループ研究を実施。普段の授業と並行してグループ活動の時間を授業時間内に設けている。班ごとに選んだ題材についてフィールドワークを行い、学んだことや感じたことをもとに「世界へ発信」を目標にスライド作成に取り組んでいる。実際に自分が伝統文化を肌で感じたり、実際に保存に関わる人からお話を聞いたり、教科書では学べない貴重な学びである。身近な文化や伝統に対する関心を高めるきっかけにもなった。



フィールドワーク



製作中の話し合い

生徒の感想 (原文のまま抜粋)

みんなと意見交換ができて何より楽しい。グループワーク、フィールドワークやみんなで考えるのはとても楽しい。自分だけでは難しいことも友達の意見があればできることも多い。挙母祭りでは外国人の人の話を聞いたり、文化を深く知ることができた。学校内だけでなくとどまらず、外で英語の能力を試す機会があるのはいいことだと思う。普段あまりふれあいのない子とふれあうきっかけになるので嬉しい。自分の知らない世界のことに学べ、自分にはまだまだ知らないことがあると痛感し、より多くのことを知りたいと思った。視野を広がることも大切だけれど、地域のことや自分の国を大切にすることも必要だと思った。日本の良さを伝えていきたい。

## 審査委員特別賞

宮城県気仙沼市立面瀬小学校

岩槻 仁

## 5. 成果と課題

「総合的な学習の時間」や地域連携など他の活動を通して学んだり体験したりしたことを英語を通して再び扱うことができた。従来の英語の授業では「教科書を教える」ことに多くの時間を費やし、コミュニケーション活動も道案内など実用的な練習が多かった。しかし、今回ESDの視点を取り入れた英語授業の実践を通し、「教科書で教える」授業になったと感じる。ESDの視点を取り入れることで、授業目標を英語の技能だけでなく、異文化の知識や持続可能な社会に必要な態度や価値観を身に付けることと高く設定することができた。そして、生徒たちがこれまでより意義深い内容、正しい解答のない話題について英語を使って生き生きとコミュニケーションをとり、課題に取り組む姿を見ることができた。

本当の意味での英語のコミュニケーション能力の育成には批判的に考える力、英語力、さらに仲間とともに協力することが欠かせない。英語教育にはまさにESDの視点が重要な役割を果たすと改めて感じた。学年末に全校で行う総合発表会では生徒が自らの取り組みを英語で発表し、他の学年の生徒もこれらの学びを共有でき貴重な場となった。



総合発表会の様子



発表で使用したスライド

課題としては他教科との連携、教師の指導力向上、教員間の協力があげられる。英語の教師は英語という手段を用いて様々な事柄を扱うことができる。しかし、社会問題とくに歴史など専門知識の必要な領域も多くあり、他教科との連携が不可欠である。

また、英語教師がContent-based teachingについての理解と技術を向上させる必要がある。そしてESDの視点から、3年間の英語の授業を通して卒業時に生徒にどのような英語力を身に付けさせるのか深く議論をする場を作っていくことが必要であると感じる。

ESDの視点を取り入れた英語の授業を行うにあたり、名古屋外国語大学の教員ワークショップに参加し、授業改善のためのアクション・リサーチを行った。毎月のワークショップにおいて授業実践を発表し、大学の先生や他に参加している先生方から、第二言語習得論に基づいたより効果的なコミュニケーション能力育成のための指導方法について意見や助言をいただき大変参考になった。ESDの視点からもコミュニケーション能力は重要である。教師の指導技術を向上させるためには継続した学びの場が重要であると改めて感じた。今後はアクション・リサーチを通して、「ESDの実践を通して生徒がいかに関文化理解やコミュニケーション能力を高めているか」をさらに検証していきたいと考えている。



名古屋外国語大学教員ワークショップの様子

### 【参考文献等】

○社団法人日本ユネスコ協会連盟

『守ろう地球のだからもの豊かな世界遺産編』

○Tom Kenny “Nice Talking With You”

○Pearson Education (2009) 『Impact Issues 2』

## 「人とつなぐ 自然とつなぐ 未来へとつなぐ」

### 1 はじめに

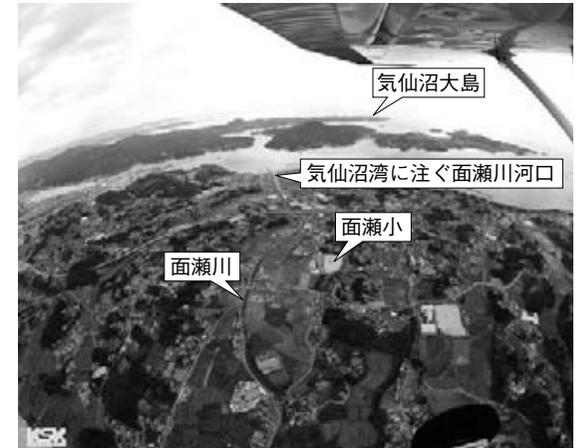
本校は、昭和59年に開校した市内で一番新しい学校であるが、平成元年頃から面瀬川の水質調査や生き物調査を行ってきた歴史がある。2002年からは、米国の小学校とのパートナーシップをもとに、宮城教育大学等の支援を受けながら、「水辺環境と人々の生活」をテーマに、学年ごとのペアプロジェクトを作成・交流して、地球規模での環境教育を実践してきた。

現在は、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ために、これまで取り組んできたプログラムを見直しながら、生活科・総合的な学習の時間を本校のESD（持続発展教育）の核となる学習に位置付け、面瀬川での探究活動を中心に「環境教育」を推進している。

### 2 面瀬川で学ぶ意義

面瀬川は、全長わずか10.4kmの2級河川である。長い間地域の水田を潤し、森と海をつなぐ川として気仙沼湾の生態系や養殖業を支えてきた。また、面瀬川には、ウキゴリやウツセミカジカ、ヤマメ、ハグロトンボやコオニヤンマなどの貴重な生き物が数多く生息し、豊かな生態系を今につないでいる。しかし、ここ数年の急速な宅地化や三陸自動車道の建設、さらに東日本大震災による河口沿岸域の甚大な被害により、面瀬川周辺の環境への影響が懸念される。

このような中で、面瀬川が育んできた環境にかかわり学ぶことは、自分たちの生活の在り方を見つめ、よりよい地域の未来の在り方について考え、持続可能な社会の構築に向けて必要な資質・能力を身に付ける上で意義があると考えます。



写真①気仙沼湾に注ぐ面瀬川（中央が面瀬川）  
【提供 KSK国際総合企画株式会社（2004年撮影）】

### 3 本校の課題と育みたい資質、能力

環境に関する意識調査（H22.6.3年以上）を行ったところ、「環境問題に関心を持ち、日常生活の中でも環境に優しい取組をしている。」と答えた児童が全体の8割を占めていた。このことから、おおむね環境問題に対する児童の意識は高まっていると考える。しかし、指導する中で、

- ① 課題意識をもって、進んで人から話を聞いたり、図書などの資料を使って調べたりなど、主体的に課題を探究したり、学びあったりする態度が十分見られない。
  - ② 「体験から何を感じ、どう考えたのか」などの学びが、児童の話し合いや発表、まとめの作品などからあまり感じ取れないことや、各教科での学びが活用できていないことなど、自ら考え、「表現する力（思考力・判断力・表現力）」に高まっていない。
  - ③ 環境教育に継続して取り組んできたものの、進んでゴミを捨てるや物を大切に使うなど、学校や家庭、地域社会の生活の中に十分に見えていない。
- という、反省が残った。

このことから、本校で育みたいE S Dの資質、能力の重点を以下3点とした。

- ① 「主体的に学ぶ意欲」
- ② 「自ら考え、表現する力」
- ③ 「実践する力」

#### 4 校内研究の取り組み

##### (1) 校内研究主題について

「自ら考え、表現する力」を高める指導

本校では、「主体的に学ぶ意欲」「思考力・判断力・表現力」の資質・能力を高めるためには、学習活動が体験に終えることなく、「物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営み」としての探究的な活動の指導改善が必要であると考えた。つまり、児童が「ひと・もの・こと」とかかわって意味ある課題を設定し、計画を立て、体験活動や調べ活動を通して情報を収集する。必要な情報を整理・分析したり、判断したりしながら、既習の経験や知識と結び付けて考える。考える活動から発生した自分の考えや意見などを、言語を用いてまとめ、表現する。それらを発信し、他者と意見交流し合い、さらに自分の考えを深めたり、広げたりする。このような学びが必要であると考えた。

そのためには、次の視点での指導改善が大切であると考え、以下のように設定した。

【視点1】地域人材やNPO等との連携を計画的に年間計画に位置付ける。

【視点2】言語活動に関して、各教科との関連を図る。

【視点3】「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の探究過程における言語活動の充実を図り、探究過程における指導を工夫する。

##### (2) 各学年の活動（平成23年度）

学年	単元名
1	おもせのしきの自然を楽しもう(生活61h) はなやさいをそだてよう(生活15h)
2	おいしい野菜を作ろう(生活30h)
3	レッツゴー！おもせたんけんたい(総合70h)
4	未来へつなげ！面瀬川の命(総合70h)
5	探ろう、伝えよう豊かな気仙沼の海(総合70h)
6	面瀬環境フェスタを開こう～始めよう、自分たちにできること～(総合70h)

##### (3) 高学年の取り組み

高学年では、研究テーマに迫るために、「新聞作り」を言語活動の重点に位置づけ指導の柱とすることとした。新聞づくりには、「テーマの決定」「取材計画」「取材」「考察」「結論・まとめ」「意見・感想」「発信」の過程がある。この過程は、総合的な学習の時間の学び方に類似する点が多く、新聞をつくる過程を学ばせることで、学び方やものの考え方を身に付けることができると考える。また、テーマを決めたり、取材計画を立てたりする過程での話し合いや新聞をつくる過程での書く活動を通して、児童の言語力や思考力・判断力・表現力を高めることができると考えた。

##### ① 実践の概要

###### ア 年間計画の作成

前年度の反省をもとに、活動のねらいや活動内容、教科との関連、地域人材等との連携を見直し、活動内容にあった適切な地域人材やNPO等との連携を年間計画に位置付けて作成した(図①)。

教科との関連		連携
○6年理科上 「地球と生き物のくらし」	○宮城県環境政策課 TEL:211-2968	
○6年道徳 「家族さんからのメッセージ」	○東北電力 TEL:9421	
○6年理科下 「電気がわたしたちのくらし」	○気仙沼市生涯学習課 TEL:21442	
○6年国語上 「イースター島にはなぜ森林がないのか」	○NPO法人「大島大好き」	
○6年家庭 「きれいでしようクワーン大作戦」「古い車庫を修繕しよう」		
○6年理科上 「地球と生き物のくらし」		

【図①】6年総合的な学習の時間年間計画

##### イ 主な活動の概要

###### 活動例1 「単元の導入段階」における連携

○6学年「探ろう、知ろう、地球温暖化(小単元)」の取り組みから

地球規模の環境問題への課題意識をもたせるために、外部講師等と連携し、温暖化の仕組みやエネルギーとの環境の関係、地球温暖化防止の取り組みなどについての学習や体験の場を設定した。

a:地球温暖化について学ぶ(理科教員と連携写真②)

学習の導入として、地球の平均気温が上がっていることや、温室効果ガスが増える原因は、化石燃料を燃やすことなどによる二酸化炭素などの排出などがあることを学んだ。(写真②)



b:地球温暖化の影響とそれを防ぐための取り組み(節電や3Rなど)について学ぶ(宮城県環境政策課との連携 写真③)

「横関さんから、地球温暖化を防ぐには、節電がとても大切なことを教えていただきました。その中で、「みんなでできる節電ポイント」として、①こまめにスイッチオフ②待機電力を減らす③エアコンで節電④冷蔵庫で節電⑤照明で節電⑥テレビで節電⑦その他で節電と、たくさんの節電方法を教えていただきました。」(児童新聞記事から抜粋)



c:循環型の試みについての講義(NPO法人大島大好き・白幡氏と連携 写真④)

「NPO法人大島大好きの白幡昇一さんは、菜の花から採れる菜種油を利用した『エコプロジェクト』を行っている方です。菜の花を育てて採れる菜種油を自動車の燃料にすることは、二酸化炭素の排出量を0にすることになるので、地球温暖化防止に役立っているということでした。白幡さんは『自分達だけの地球ではない。みんなで工夫して温暖化を止めましょう。』とお話ししていました。」(児童新聞記事から抜粋)



d:エネルギー学習(太陽電池、充電電池、人間電池実験・SANYO体験学習との連携 写真⑤)

「太陽光で充電した電池を使った実験で、わたしたちは太陽エネルギーのすごさを実感しました。太陽のエネルギー



を効率よく電気に変える技術が進めば、火力発電や原子力にたよらない新しいエネルギーとして期待ができてそうです。」(児童新聞記事から抜粋)

###### 活動例2 「課題設定」の段階の指導の工夫

○6学年「ウェビングマップを活用し、グループ課題を作る」取り組みから

グループ毎に「ウェビング」を活用して追究したい課題を明確化し、新聞で何を伝えるかをはっきりさせる話し合いを行った。(資料①)



【資料①】ウェビングで課題を絞り込む

###### 活動例3 「計画を立てる」段階の指導の工夫

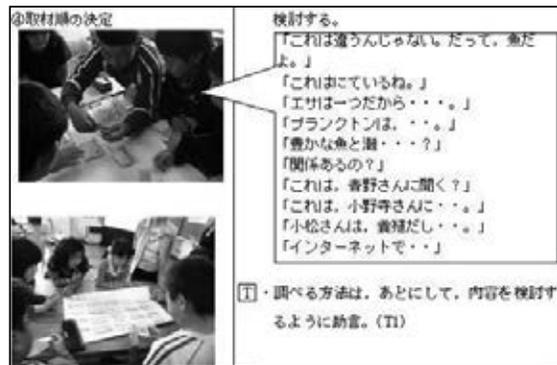
○5学年「『編集会議』で『取材計画』を立てる」の取り組みから

本単元の指導にあたっては、指導の効果を高めるために、河北新報社と連携を図り(写真⑥)、新聞づくりを柱とした言語活動に重点を置いた指導を探ることとした。



主体的に課題を追究する力を高めるには、「計画を立てる」段階で、一人一人によく考えさせ、見通す力を高めることが大切になると考え、「何を取材するのか」や「どのような方法で取材するのか」「どのような順序で取材するか」など、話し合いのポイントを示し、グループで話し合わせた(資料②)。

その後、グループの計画を発表させ、計画内容がテーマと合っているか他のグループとの意見交流の場を設定した。



【資料② 付箋紙を活用し、取材内容を検討する】

### 活動例5 「情報収集」の段階の指導の工夫

○6学年「情報収集（取材活動）」の取り組みから

取材活動では「新聞づくり講座」（河北新報社）を設定し、取材ポイントについて学んだ。（写真⑦）また、地域の方へのインタビューの場を設定した（写真⑧）学んだことを生かしなが



### 活動例6 「整理・分析」の段階の指導の工夫

○5学年「整理・分析の段階」の取り組みから

取材活動やアンケート調査、自分たちが取り組んだエコ活動の取り組みなどで集めた情報を、自分たちのテーマに照らし合わせながら、新聞の割り付けに沿って記事にする情報を整理させた（写真⑨）。不十分な情報については、再度調べさせた。



### 活動例7 「新聞をつくる」段階の指導の工夫

○「パソコンでの新聞づくり」の取り組みから

新聞記事の見出しの付け方や新聞の割り付けについては、事前に「新聞づくり講座」（河北新報社）を設定し、記事の書き方等についてのアドバイスをいただいた（写真⑩）。



新聞は、担当記事を決め、分担して壁新聞（資料③）に仕上げたり、パソコンを使って作成したりした（写真⑪、資料④）。



【資料③ 6年 手書きによる壁新聞】 【資料④ 5年 パソコンで作成した新聞】

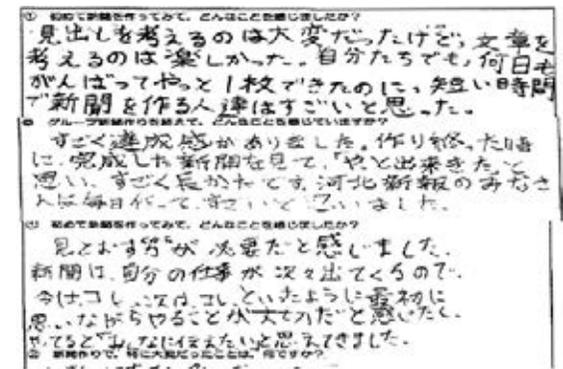
### 活動例8 「発信」段階の指導の工夫

○6学年「面瀬環境フェスティバル」の取り組みから

3学期には「面瀬環境フェスティバル」を開き、1学期から探究してきた「地球温暖化の原因」や「温暖化を防ぐための『3R』の取り組み」「自分たちが取り組んでみての感想」「エコ生活の呼びかけ」などの発表を行った。（写真⑫⑬）他にも環境ポスターを公共施設に掲示したり、壁新聞を市役所ホールや公民館に掲示したり、地区の自治会の協力を得て新聞を回覧するなどした。



### ウ 活動後の6年児童の感想



### (4) 地域人材等と連携した他学年の実践例

① 1年「はなや やさいを そだてよう」

祖母や保護者を地域の先生として招き、収穫した枝豆やカボチャを使った地域に伝わる料理を作りながら、昔の人々の知恵を学んだ（写真⑭）。



② 2年「おいしい野菜をつくろう」

野菜栽培のまとめとして、栄養士の先生を招いて野菜のパワーについて学習した（写真⑮）。



③ 3年「レッツゴー！おもせたんけんたい」

面瀬川の生きもの観察や昔の川の様子について、公民館の館長さんから話を聞き、地域の豊かな自然を守るために自分たちのできることを考えたりする学習を行った。（写真⑯）。



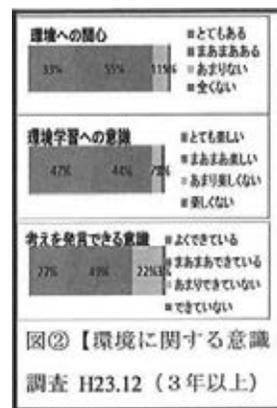
④ 4年「未来へつなげ！面瀬川の命」

市役所環境課職員の指導で、面瀬川に住む水生生物の調査による水質判定を実施した（写真⑰）。また、面瀬川の環境の移り変わりについて、公民館の館長さんや地域のお年寄りへのインタビューを行うなどして、面瀬川の環境を追究した。



### 5 児童の変容から

意識調査の結果(図②)「環境への関心」「環境学習への関心」の意識が高く表れていることから、多くの児童が関心をもって環境の学習の取り組んだと考える。特に、「学習が楽しい」と感じている児童が90%以上となった。「思考力・判断力・表現力」に関しては「考えを進んで発言できる」と意識している児童が約80%を占めた。



### 6 成果と課題

- (1) 児童の変容から、地域人材やNPO法人等と連携した学習プログラムは、児童の「自ら学ぶ態度」を高める上で効果があったと考える。しかし「魚や水生昆虫の名前や生態等の指導には、専門的な知識が必要だ。」という反省もあり、専門機関との連携を進めていくことが課題となった。
- (2) 「思考力・判断力・表現力」に関しては「考えを進んで発言できる」児童の割合が高いことや児童の感想から、言語活動に重点を置いた工夫は効果があると考えられる。しかし「情報の整理・分析」の段階で、グループのニーズに合わせた適切な指導が十分できなかったことから、更に具体的な指導の必要があることが課題となった。また、観察記録や説明文、発表原稿などの書き方やグラフの表し方、読み取り方など、他教科で習ったことの活用ができていないことから、更に他教科との関連づけた指導の工夫が課題となった。
- (3) 東日本大震災を体験したことにより、中学校や地域と連携した防災教育を含めた地域型環境プログラムの見直しが必要である。

### 7 新しい視点でのESDの取り組み

本校では「ESDと学力向上」という視点から、これまでの課題を踏まえ、より一層「自ら考え、表現する力」を高めるために、「書く活動に重点を置いた生活科・総合的な学習の時間の指導の工夫を通して」をサブテーマとし、各教科との関連を図った指導に取り組みはじめた。また、防災教育についても新たに取り組みはじめた。



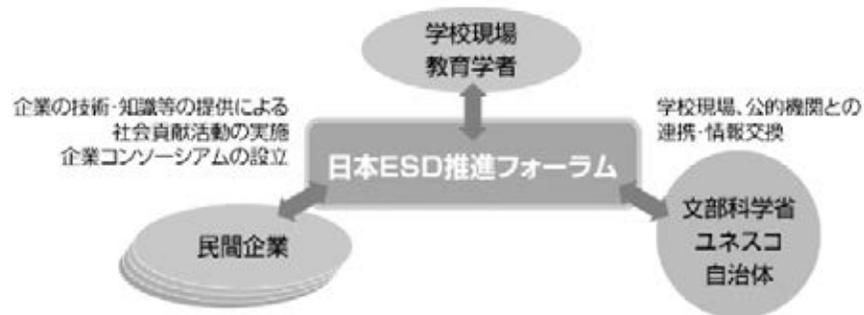
【図③ ESDの視点と校内研究構想図】



NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムについて

NPO 法人日本持続発展教育 (ESD) 推進フォーラムは、発想豊かで、柔軟性に富んだ早い時期から、持続発展教育を取り入れることが大切だと考え、持続可能な社会を担う人として、具体的なビジョンを持った子どもの育成を目指し、2009年5月に発足いたしました。

「社会の担い手を育てるため、ESDを教育現場へ推進する」という共通の目標のもとに、産・官・学が共同するための橋渡し役となって活動しています。



**主な活動**

■教育関係者へ向けた活動

学校教育の現場でESDを普及していくため、主に教員を対象にした研修会等を全国各地で開催します。

■ユネスコスクールの普及

ユネスコスクールの目指す研究テーマとESDのテーマが一致していることから、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置づけ、加盟校の増加に取り組んでいます。当NPOでもその活動をサポートしています。

■社会全体で子どもを育てる仕組みづくり

企業や自治体・団体等の力で『持続可能な社会づくりと担い手』をどのように育成していくか考え、実行していきます。

■ユネスコスクール全国大会 持続発展教育 (ESD) 研究大会 の実施

ユネスコスクール、教育関係者、自治体・団体、企業関係者がESDの実践研究について相互交流を図るとともに、日本におけるESDの普及・発展を考える研修会を開催しています。

■持続発展教育 (ESD) 大賞

ESDを実践している、全国の小中高等学校の中から優れた活動に対し、持続発展教育 (ESD) 大賞を贈ります。

■ホームページを通じた情報提供

ESDの実践紹介など、最新の学校現場の状況をお伝えしていきます。企業や団体・自治体などが制作したESDの趣旨に合う教材を集めたネットライブラリを開設しています。

(NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム ホームページ: <http://www.jp-esd.org>)

ぜひ NPO法人 日本持続発展教育推進フォーラム  
**ホームページをご覧ください!**

NPO法人 日本持続発展教育 (ESD) 推進フォーラムでは、ホームページを使って、情報発信を行っています。

Facebookでも近況報告を行っています!



<http://www.facebook.com/jp-esd>

**ESD研究大会**

ユネスコスクール全国大会 / 持続発展教育 (ESD) 研究大会の最新情報を掲載しています。

**ESD大賞**

すぐれたESDの取り組みを表彰しています。受賞校の活動の様子も掲載しています。

**ESDライブラリ**

企業の活動、企業が作成した教材を紹介しています。教材のダウンロードも可能です。

NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

TEL:03-3295-7052 FAX:03-3295-7054 E-mail:info@jp-esd.org

第3回持続発展教育(ESD)大賞  
受賞校実践集

発行日：平成25年1月26日

発行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

Tel：03-3295-7052

Fax：03-3295-7054

E-mail：info@jp-esd.org